

音楽史—異なるコース学生のための音楽授業

音楽科・岸 啓子

1. 授業の目的と到達目標

古代ギリシャから現代までの西洋芸術音楽の歴史の流れを理解し、各時代の音楽観および楽曲、形式・様式・作曲技法の基礎知識を習得する。

音楽を取り巻く時代状況や文化と音楽の相互の関係について、基礎的知識と、具体的な作品を対象に考察を進める方法を身につける。日本音楽と民族音楽の概説的知識を習得するとともに、明治以後の日本におけるその融合についても、作品に即して理解できるようにする。

以上のプロセスを通し、人間にとっての音楽の意味を探る授業でもある、

到達目標

時代の文化的特色と音楽観をふまえて音楽家と音楽作品を理解できるようになる。これは学習指導要領にある「様々な音楽表現を理解する」要請に、根源的かつ適切に応えられる知識と実力の獲得に繋がるものである。

ディプロマポリシーとの関連では、教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識の修得である。（知識・理解）

授業の概要とねらい：古代ギリシャから現代にいたる芸術音楽の歴史を辿り、各時代の音楽観、音楽理論と作品を概説する。音楽史を天才列伝と見るのではなく、古典派とロマン派を絶対視することのない、自由で柔軟な音楽の価値判断を問いかける。時代の文化や宗教、生活のなかでの音楽の在り方を学び、他の芸術と音楽の関係についても理解を深める。さらにポストモダン運動の中で起こった20世紀の音楽の諸相も扱う。免許法の関係で日本音楽史・民族音楽についても2コマ程度いれる。

授業のスケジュール

- 1 古代世界における音楽 古代ギリシャの音楽、音楽理論、音楽観
- 2 グレゴリオ聖歌
- 3 多声音楽のはじまり 中世の世俗音楽
- 4 14世紀 イタリアとドイツ
- 5 15世紀 ブルゴーニュ楽派
- 6 ルネサンスと宗教改革の音楽、ルター派とイギリス国教会

- 7 バロック音楽の全体的特色
- 8 バロックの声楽と器楽
- 9 オーケストラとは—楽器と楽曲
- 10 古典派時代の音楽と楽曲形式
- 11 音楽の形式、オペラ、リート、バラード、組曲、メヌエット、ノクターン等
- 12 ロマン派音楽
- 13 日本伝統音楽・民族音楽および西洋芸術音楽との影響関係について
- 14 20世紀音楽 無調からポストモダン
- 15 試験

時間外学習のルールとしては、音楽をなるべく多く聴くことを求めている。音楽会（生の演奏会）に行き、レポートを作成することを課している。出演者または舞台美術制作者としての演奏会を作る側の体験記でもよい。

受講条件は演奏能力不問、読譜能力は必要である。授業の中で演奏実技を行うことはないものの、授業内容の理解に、音部記号や音程、調性など中学高校程度の音楽理論の基礎知識は必要である。

音楽全般の基礎教養の不足する学生に合わせて、作年度から次の理由により教科書を変更している。

1. 見開き2ページ読み切り型で、内容を把握しやすい。
2. 付録のCDで音楽を聴き、確認できる。
3. 抽象的説明が少なく、具体例で示してある。用語も限定されている。

音楽文化論がなんとか軌道に乗った今、困難を感じているのはこの科目である。音楽史は以前音楽科の教科専門科目であったが今は課程共通科目であり、音楽の免許科目でもある。問題は次の3点である。

- ① 課程共通科目として音楽と美術の学生が受講する。内容が音楽に特化していて、美術の学生には負担が大きい。
- ② 音楽の免許科目でもあるので、学教・音文両課程の学生が受講する。質の確保は不可欠であり、内容もある程度決まっている。
- ③ 音楽の専門科目・免許科目であることが、美術の学生にとっては不必要な授業レベルの原因となっている。

これはカリキュラムの問題でもあり、今後の改善

が求められるだろう。

音楽を語る言葉の獲得のため、作曲家・作品の調べ学習とその発表を課している。

今年度はミニテストを導入、計7回実施した。その日の授業内容から10問程度を出した。目的は3つある。

- ① 基礎基本の確実な習得
- ② 美術学生の当事者意識の覚醒
- ③ 実技以外の音楽学習の定着

2. 授業評価 アンケート項目

質問紙による5段階評価法による。5段階

5強く思う ～ 1強く思わない

- 問1 この科目にきちんと取り組んだか。
- 問2 出席状況は良好か。
- 問3 授業の目的は明確か。
- 問4 授業内容・規模は適切か。
- 問5 LDやCD、ビデオ等の使用の適切さ。
- 問6 教員の説明は解り易かったか。
- 問7 発表や質問の機会は与えられたか。
- 問8 発表に意欲的に取り組んだか。
- 問9 授業のレベルは適当でしたか。
- 問10 自分の考えが培われたか。
- 問11 この授業を受講したことが、今後の学習に、有意義であると思わるか。
- 問12 授業の良好な雰囲気は保たれていたか。
- 問13 シラバスを読んだことがあるか。
- 問14 この授業は1年次がよいと思うか。
- 問15 この授業でよかった点（自由記述）。
- 問16 この授業で改善すべき点。（同上）

3. 授業評価結果 22名

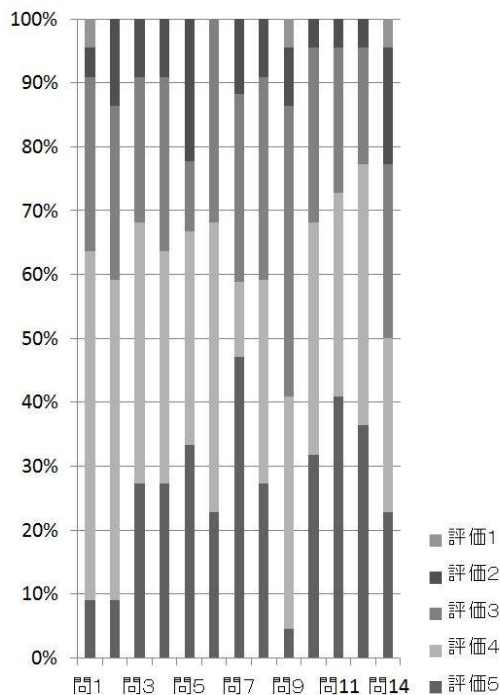
評価	評価5	評価4	評価3	評価2	評価1
問1	2	12	6	1	1
問2	2	11	6	3	0
問3	6	9	5	2	0
問4	6	8	6	2	0
問5	9	9	3	6	0
問6	5	10	7	0	0
問7	8	2	5	2	0
問8	6	7	7	2	0
問9	1	8	10	2	1
問10	7	8	6	1	0
問11	9	7	5	1	0
問12	8	9	4	1	0
問14	5	6	6	4	1

シラバスを読んだ20、読んでいない2

音楽文化コース2年 10名

芸術文化コース2年 8名

教員養成音楽専修22名 それ以外 2名



4. まとめ

昨年度は説明のわかりやすさ・授業レベルでそれぞれ6名1・2がいたのに対して、今年は問6説明のわかりやすさの1・2回答はゼロで、改善された。問9の授業レベルは、1・2評価が昨年同様3名であった。4・5は9名と半数に達しておらず、教員の希望が先行する形となった。今年度の配慮事項だったが、十分ではなかった。

おそらく美術の学生と思われるが、自由記述に、「芸術概論は試験がないのに音楽史は試験があり、不公正だ」と記していた。判断基準に問題があることは確かだが、本音であろう。平等なスタートを切っていないことが公正な評価を受けられない心配につながり、それが学習意欲減退を惹起した模様である。この回答者は問11授業の意義はそれなりに認めている。自分の専門と関連のある異分野を学ぶ意義を認識し、意欲を持った学生もいたが、工夫のしどころはまだあるということである。実際ミニテストの結果は音楽学生の方が高得点で、美術学生に困難が大きかったことは推察できる。

課程共通科目において、前期の音楽文化論は所属コースによる有利不利が現れないような内容だったが、音楽の土俵上での音楽史はそうはいかない。意欲の減退につながらない工夫をしてゆきたい。